

RI\*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0015
調査タイトル	記載なし
論文／雑誌名	「卒業生の大学評価－日本女子大学教育学科の事例－」 『日本女子大学 紀要 人間社会学部』第4号
著者	牧野暢男・村松幹子
掲載ページ	pp.249-260.
発行年	1994.03
出版社	日本女子大学人間社会学部

ISSN 0917-2076

日本女子大学

# 紀 要

人間社会学部

第4号

平成5年

## 目 次

林忠正コレクション競売目録瞥見(四)……………	1	
『陽気なミュージシャン』雑記——ブレンターノ研究への補充資料②——……………	9	及川 茂……………
主人公グレーゴル(Ⅱ)——人間から動物へ……………	17	齋藤 保男……………
日本メロドラマの幕あけ……………	27	高橋 行徳……………
		荒瀬 豊……………
—————		
ソーシャル・サポート行動構造とネットワーク……………	1	阿部洋子・本間道子……………
刺激の入力経路からみた情報処理過程の検討……………	17	川原 ゆり……………
NLPの諸問題(Ⅰ)——「世界」の表現形式について……………	29	須賀 哲夫……………
ガウスの発見と数値計算のはざままで——(2)連珠形の積分……………	39	杉本 敏夫……………
主観的輪郭線図形における形態把握の多様性——視覚と触覚による知覚型を通じて——……………	55	望月登志子……………
Effects of Coping Behavior on Residential Crowding……………	69	本間 道子……………
「祖師林」考證……………	79	于 保田……………
Poeの詩論と実践——“The Philosophy of Composition”と“The Raven”——……………	95	近藤 啓子……………

B. S. Johnson the Shandean .....	糊澤雅子	105	
アリストテレスの無限概念.....	新海邦治	115	
FEMINISM と PACIFISM の融合(1)——NCCCW にみる平和教育の実践——	杉森長子	123	
日本人の犯す文法上の誤ちと正しい教授法.....	Bernard LEURS	137	
日本における Oral History に対する評価の歴史的変遷とその展望 .....	金子マーティン	147	
ドイツ民間社会福祉事業団の財政——バイエルン・デアコニー事業団の活動——	坂本道子	159	
成瀬仁蔵とバスケットボール.....	馬場哲雄	167	
ヘーゲルの論理学における客観的論理学——主観的論理学という区分の出自について	幸津國生	177	
——ニュルンベルク時代のギムナジウム講義を顧慮して——	丹野真紀子	187	
透析施設における患者会活動と医療ソーシャルワーカーの役割.....	牧野田恵美子	199	
精神病院入院患者の人権とソーシャルワーカー.....	山崎道子	209	
パーソナリティの発達に関する縦断的研究	——二十五歳の一女性の自己同一性をめぐって(Ⅱ)——	辻功	223
わが国における生涯教育・生涯学習推進政策の成果の検討.....	速水洋	235	
子どもの自己形成過程における誇大化の意味.....	牧野暢男・村松幹子	249	
卒業生の大学評価——日本女子大学教育学科の事例——	渡邊恵子	261	
自立と自己の性の受容(3)——性差・発達差の検討——	久東光代	277	
統計解析ソフトウェア操作の効果的な指導法について	——応用行動分析手法による課題分析と評価テストの検討——	久東光代	277
一九九三年度(平成五年)人間社会学部 卒業論文題目.....		293	

# CONTENTS

A Study of Social Support Behavior Structures and Social Network .....	ABE Yohko, HOMMA Michiko	1
Study on the responses towards various stimuli upon the cerebral hemisphere .....	KAWAHARA Yuri	17
Problems of NLP(1)—How to represent the “World”?— .....	SUGA Tetsuo	29
C. F. Gauss, Zwischen seiner Entdeckung und den numerischen Rechnungen—Das lemniskatische Integral—(2) .....	SUGIMOTO Toshio	39
Perception of Subjective Contour—Comparative Study of Visual and Tactual Scanning— .....	MOCHIZUKI Toshiko	55
Effects of Coping Behavior on Residential Crowding .....	HOMMA Michiko	69
A Study of the Zu Shi Lin .....	YU Bao Tian	79
Edgar Allan Poe’s Poetic Principle and Practice—“The Philosophy of Composition” and “The Raven”— .....	KONDO Keiko	95
B. S. Johnson the Shandean .....	KURUMISAWA Masako	105
Aristotle’s Concept of Infinite .....	SHINKAI Kuniharu	115
Amalgamation of Pacifism and Feminism—a case study of NCCCW and its Peace Education— .....	SUGIMORI Nagako	123
Faute et Apprentissage Complémentarité Pédagogique. Pédagogie de La Faute et Enseignement de La Grammaire .....	LEURS Bernard	137
Oral History in Japan—Historical Shifts in Valuation and Prospects— .....	KANEKO Martin	147
Finanzwirtschaft des Diakonischen Werkes Bayern .....	SAKAMOTO Michiko	159
Jinzo Naruse and Basketball .....	BABA Tetsuo	167
Über die Herkunft der Gliederung von objektiver und subjektiver Logik in Hegels Logik—im Hinblick auf die Nürnberger Gymnasialkurse— .....	KOZU Kunio	177

Self-Help Groups of Hemodialysis Patients in Clinic and the Role of Professional .....	TANNO Makiko	187
Rights of patients in mental hospital .....	MAKINODA Emiko	199
A Longitudinal Study on Personality Development —On the Self-Identity of a Twenty-Five year old Woman— .....	YAMAZAKI Michiko	209
The effect of policy to promote life-long learning activities in Japan .....	TSUJI Isao	223
The significance of grandiosity in the formation of children's self .....	HAYAMI Hiroshi	235
University Evaluation by Alumni—A Case Study at Department of Education, Japan Women's University— .....	MAKINO Nobuo, MURAMATSU Mikiko	249
Jiritu and Self-acceptance of Own Gender—Sex-differences of developmental changes — .....	WATANABE Keiko	261
About the Effective Teaching Method of Computer Operation of Statistical Analysis System—An Examination about Task Analysis and Assessments by the Applied Behavioral Analysis Technique— .....	KUTO Mitsuyo	277
—————		
Quelques commentaires au sujet des catalogues de vente de la collection Hayashi (1902-1903) (IV) .....	OIKAWA Shigeru	1
“Die lustigen Musikanten” —Eine Ergänzung zur Brentano-Forschung ②— .....	SAITO Yasuo	9
Grundcharakteristiken des Protagonisten in der „Verwandlung“ ( II ) .....	TAKAHASHI Yukinori	17
Opening Social Scenes of Melodrama in Japan .....	ARASE Yutaka	27

# 卒業生の大学評価

— 日本女子大学教育学科の事例 —

牧 野 暢 男  
村 松 幹 子

## 1. 本稿の目的

「大学とは何か」は古くから多くの研究者たちが追求してきたテーマであり、また今日、社会変動の中で改めて問題とされていることがらでもある。その意味で、このテーマは古くて新しいテーマである。大学には過去にも現在にも実にさまざまな想いが寄せられ、また、多様な社会的評価や大学イメージが形成されている。今日、18歳人口減少の時代を迎えて、「これからは学生が大学を評価し、入学すべき大学を選ぶ時代になる」<sup>1)</sup>ともいわれるように、それぞれの大学がその存在理由をアピールしていく必要性が強調されている。このような状況をふまえ、各大学で内部評価を中心に大学評価あるいは大学教育の評価が進められている。

研究面では、これまで、大学とは何かについての研究はきわめて多いが、大学評価に関しては実証的には本格的な研究はまだあまり進展していないといえよう。もっとも、在学生の満足度に関する調査が個々の大学についてかなり行われており、学生がその大学をどのようにとらえているかについては、様々な知見が蓄積されてきている。また、金子元久らは最近、卒業生とその大学教育をどう捉えているかについて調査研究<sup>2)</sup>を実施しているが、これは卒業生の就業と大学教育の意味に関する研究であり、大学評価そのものを目的としているものではない。

本研究では、大学評価に対する実証的研究の一環として、卒業生の大学評価について事例研究を行った。卒業生は大学教育を実際に経験しており、しかも現在は大学を客観的にみることのできる存在である。その意味で本研究は、これまで研究の乏しい卒業生の大学評価に焦点をあて、卒業生の立場から大学での教育や学生生活を振り返ることによって、大学(学部・学科)とは何であったのか、それをどう評価するかを明らかにし、大学の実証的研究に従来とはやや異った視点から光をあてるとともに、今後の大学のあり方を考える一助ともしたい。

## 2. 本研究で使用したデータ

本研究では、1992年8～11月にかけて日本女子大学文学部教育学科全卒業生(2786名)を対

象として実施した調査データのうち、自由回答方式で回答を求めた質的データを使用する。この調査は、日本女子大学教育学科が文学部から人間社会学部に1993年3月をもって移転を完了するのに際し、日本女子大学心理・教育学会の依頼を受けて、筆者らが調査を実施したものであり、その調査結果の概要は既に「文学部教育学科卒業生のその後」と題して、日本女子大学教育学科四十二年記念事業企画委員会発行の『日本女子大学教育学科四十二年誌』に掲載されている。本研究は、それらの調査結果のうち「大学時代の思い出」「卒業後の生活に対する大学での学習や体験の意味」「日本女子大学を卒業してよかった点・よくなかった点」「自分の子どもが日本女子大学に入ることに對する賛否とその理由」「後輩へのアドバイス」など、卒業生が大学をどうみているか、またどう評価しているかに関わる質的データの部分を再分析したものである。

なお、上記調査の概要を次に簡単に述べておく。

#### 1) 調査対象・回答者数

イ) 調査対象：日本女子大学文学部教育学科卒業生全員（2786名、日本女子大学心理・教育学会平成4年度会員名簿による。住所不明者を除く2445名に質問紙を郵送。）

ロ) 有効回答者数・回収率：554名、22.7%

#### 2) 調査時期・調査方法

イ) 調査時期：1992年8月～11月

ロ) 調査方法：質問紙による郵送調査

#### 3) 回答者の属性

イ) 卒業後の年数：40～32年8.3%，31～22年18.6%，21～12年24.2%，11年以下48.9%

ロ) 出身高校：日本女子大学附属高校29.5%，その他の高校70.5%

ハ) 現在の就業状況：フルタイム就業40.6%，パートタイム・アルバイト就業17.7%，無職33.3%，その他8.4%

### 3. 思い出からみた大学イメージ

卒業生にとって、大学時代の思い出としてどのようなことが印象に残っているのだろうか。ここでは「学生時代の思い出として、今、あなたの心の中に最も強く残っていることはどんなことですか。」という質問に対して2つまで自由に記述してもらい、思い出・印象という観点から、卒業生がどのような大学イメージをもっているかをみようとした。それら回答を内容分析した結果、卒業生にとっての大学あるいは大学生活のイメージは、次のように分類できる。①教育・学習の場（65.3%，授業・学習，教育実習，卒業論文），②余暇生活の機能としての自己開発（50.6%，クラブ・サークル活動，旅行，レジャー，アルバイト），③出会いと人間関係発展の場（48.1%，友人関係，先生との出会い・ふれあい，寮・下宿生活），④その他（36.0%）の4つである。それぞれについて若干具体例をあげ、その内容をみておくことにする。

#### ①イメージとしての教育・学習の場

教育・学習の場としての大学に関するイメージは、授業や学習，卒業論文，教育実習，などに関するものである。

授業に関しては「試験前に友人と必死で勉強したことやレポート書きにおわれたこと」や「教職課程の講義で毎日1限から登校し、仲間たちとヒーヒー大変がりながらも楽しく生活したこと。」などの授業や学習の思い出、また「受験のためではない学習をする楽しさを知ったこと」「ゼミを通してはじめて知った思考することの楽しさ」など学習そのものの意義を見出だしたなどの回答もある。

卒業論文に関する記述も多い。「卒論の作成（友人と共同にて行った）。4年間の学生生活の中で一番勉強したと自分で感じた。」「卒論を書くことで1つのテーマを長期にわたり学ぶことを体験できたこと」など大学生活の学習の集大成として力を尽くした様子が見えがえる。

教育実習については「4年間で一番苦勞したこと。しかしその経験によって自分に自信がもてた。」「初めて受ける職業に就くことの辛さ、教育の大変さをいやというほど味わった。辛い思い出だが、鍛えられたと思う。」「“教えること”の難しさ、要点のつかみ方、分かりやすい説明の仕方などどれほど大変なことなのか強く感じました。」など、学生の立場から一変して教える立場を経験し、社会の厳しさを味わったようである。

以上からも推測されるように、卒業してから振り返ってみると、大学では学ぶ楽しさを味わったことが印象深いという点もあるが、むしろ勉強に関する厳しさ、苦勞したこと、鍛えられたこと、充実感を味わったことなどの印象の方が大学イメージとして強く残っているように思われる。

## ②余暇生活の機能としての自己開発の場

次に思い出としての大学イメージに関して多くあげられたのは、クラブ・サークル活動、旅行、アルバイトなど豊かな自由時間を利用した、デュマズディエの言う自己開発（self development）につながるイメージである。

クラブ・サークル活動では「クラブ活動を通じて、人の生きざまの凝縮図をみることができた。」「クラブ活動をやりとげた喜び、充実感（体育会）。」「同じ興味をもつ友人及び他大学、一流選手の人々などとお会いする機会が得られ、刺激となった。」「楽しみや苦しみを友人と共有したサークル生活。」など、活動そのものだけでなく、それに伴う多くの人との出会いも思い出となっている場合が多いようである。

旅行については「勉強するだけでなく、アルバイトやサークル活動などで沢山の友人ができ、いろいろな地域を旅行したこと。」「友人たちと軽井沢や千葉や高原、山といろいろな旅行をして、人生などについて語り合ったりした楽しい思い出。」「アルバイトで得たお金でお友達と夏休み、冬休みの度に自分達でプランを立て旅行した。」など、自分の時間がある学生時代ならではの余暇の過ごし方についての記述が目立つ。

その他としては「アルバイトに精を出した。そこからまたいろいろな人間を知り得た。」「図書館で思い切り沢山の本を借りて読んで楽しかったこと。」などがある。

以上のような自己開発に関わるイメージは大学生活の潜在的機能に属するものであり、それらはどちらかといえば大学生活の楽しさに結びついたものが多く、大学のレジャーランド化という批判を受ける側面でもある。しかし一方では、今日のわが国の社会状況からみて、学生時代は、若者たちが受験時代と職業生活との間で自己を発見し、新しい経験を得、余暇享受能力を開発するための貴重な時期を提供しているともいえる。

### ③出会いと人間関係発展の場

これには友人との出会い、先生との出会い、寮生活などに関することが含まれる。

友人との出会いでは、「現在まで続いている友人ができたこと。学生時代から、いろいろなこととお互いに話し合ってきた。」「好きなこと、熱中していることはそれぞれちがうけれど、それを認めあつての友人関係。いろいろ話をしたり聞いたりできる友人ができました。」の記述がみられ、友人から学生時代・現在を通じて大きな影響を受けていることがうかがえる。

先生との出会いでは、「素晴らしい先生とめぐりあえ、興味あることを学ぶきっかけができたこと」「教授陣、友人たちの多くが、傾聴する姿勢をもっており、一人の人間として尊重されることを実体験として学んだ。」「研究室に行けばいつでも先生方と話ができ、将来に向かってのよいアドバイスがいただけた。」など、先生方の人間性に触れることができた点で思い出深いようである。

寮生活では、「4年間の寮生活でお互いをさらけ出して影響し合い、生涯の友が得られたこと。」「3年間を学寮で過ごしました。日本各地の友と夜を徹して話し合ったことが一番の思い出です。」など、共同生活をすることで得た友人との信頼関係に関する記述が目立つ。

以上のような点に関しては、個々の卒業生によって経験の内容は千差万別であろう。ここでのイメージとしては、どちらかといえばプラスの面が強く出ていると考えられる。そのようなプラスのイメージをもっている者が少なくないことは、大いに評価されよう。

## 4. 卒業後の生活に対する大学教育の意味

次に、卒業後の生活に対して、卒業生が大学教育をどのように評価しているかを「あなたは日本女子大学での学習や体験は、卒業後の生活にどんな意味をもっていると思いますか。」という質問に対する自由回答からみてみよう。回答を内容分析してみると、①価値観形成の場(38.2%、価値観・考え方・行動のベース、生涯学習への姿勢の保持)、②価値観形成の要因(19.5%、友人・先輩・先生から受けた影響、校風の影響、女子のみの学生生活からの影響)、③精神的支え(14.2%、自信・精神的支え、ネームバリュー)、④資格取得の場(12.3%)、⑤その他(15.8%)に分けられる。総じて内面的な価値に意味を見出だしている記述が多いことが特徴としてあげられる。

### ①価値観形成の場

記述で最も多いのは、「価値観・考え方・行動のベースになった」という意見である。具体的には「自分の価値観の根幹を形造ってくれたと思います。」「その時々意識していなくても、判断・決断・行動の根底のところ脈打っているものがある。」「私自身の常識や価値観が育成された場であり、私そのものの価値にもなっている。」などである。また、具体的には「論理的思考方法とものごとを客観的に見る態度を身につけたので、新しい分野のことを勉強するのに抵抗なく取り組める。向上心を常にもち、生涯学習を心掛けている。」「目的意識を持って学習することの意義を知り、生涯学習への意欲づけとなった。」など、生涯学習の姿勢を身につけることができたという意見もある。

## ②価値観形成の要因

これらの価値観や自信につながる要因としては、友人・先輩・先生から受けた影響、校風の影響、女子のみの学生生活からもたらされた影響があげられる。

友人・先輩・先生から受けた影響に関する記述では、「卒業後の友人関係のつながりが深く、ネットワークの広がりがある。」「いろいろな分野で活躍されている諸先輩に（意識上）啓発される。」「数多くのいろいろな個性をもつ友人とのふれあいが、これからの人生において貴重な宝物になったと思う。」「先生方（女性）や先輩の人柄にふれることができ、それを人生の目標像としている。」など、まわりの人々から良い影響を受けている様子が見えてくる。

校風の影響に関しては、「学問についてつめこまれず自由だったこと（裏を返せば勉強しなくてもよかったこと）が、興味（学問）をいろいろな方向に向けることができた要素だったと思う。」「何か事が生じ壁にぶつかると、どこからともなく成瀬先生の信念徹底、自発創生、共同奉仕が頭に浮かび出てきて何とか解決している時があり、この頃になって実践倫理の存在価値を思えます。」などがあげられる。

女子大学の意義に関わるものとして、女子のみの学生生活のメリットを指摘している卒業生も少数（4.2%）ではあるがみられる。「女性が男性に頼らずに自立して生活していこうという意識が芽生えた。」「女性」という立場・意味を考えた体験は素晴らしいと感じています。」「女性だけの中にあっただけ、表面では女性的であるが、内面、実行面に男性同様の力量をもった方が多いと思う。」など、女性のみで得た体験などを評価している。

## ③精神的支え

「自信や精神的支えにつながっている。」ことも多くみられる。「日本女子大学で学んだということが自分自身の誇りであり、常に心にある。」「苦境に陥っても、自分に誇りを持ち前進するエネルギー源になっています。」「無形の『ゆとり』として、かけがえのない意味をもっていると思います。」「いろいろな意味で「なつかしみ」を覚えるので、心のオアシス、よりどころになっている。」などである。ネームバリューに関する記述も精神的支えの一因となっているようであり、「名前のある大学出身なので、子どもの役員や町内のリーダーに頼まれたり期待される。」「伝統のある女子大学を出ているということで、仕事の面で優遇されることが多い。」という回答もある。

## ④資格取得の場

資格取得に関する代表的な評価としては、「小学校の教員として社会の中で活動できた。再度戻る時に、免許と経験に加えて学生時代学んだことが生きている。」があげられる。

その他「子どもを育てる上で、いろいろ思い出したり、本を出しては反省させられたりしております。」など、教育学科の専門性に関連して、子育てに関する効用をあげた者も7.7%みられた。

なお、これらの記述から、大学での学習や体験の意味のとらえ方については、回生別（卒業年代別）によって評価の内容が異なるように思われる。すなわち、評価のポイントが、2～10回生では価値観・考え方・行動のベース、11～20回生では生涯学習、21～30回生では子育て、ネームバリュー、31～42回生では友人・先輩・先生の影響、資格取得・職業意識の形成と異なっている。これは卒業後のライフコースの中で、大学での体験の意味が新たに捉え直されるという面があることを示唆している。

## 5. 日本女子大学を卒業したことに対する評価（長所・短所）

次に「あなたは日本女子大学を卒業したことを、今どのように感じていますか。「よかった」あるいは「よくなかった」と思うことなど、自由にお書き下さい。」という質問に対する回答から、大学への評価をみておきたい。よかった点、よくなかった点、プラス・マイナス両方の3つに分けて単純集計をしたところ、以下のようにになっている。「よかった点」をあげた者は全体の65.0%で、①人間関係形成の場（35.6%、友人・先生との出会い、先輩との出会い）、②校風（25.4%、環境・校風、女子のみである点）、③高い社会的評価（13.9%）、④その他（25.1%）となっている。「よくなかった点」をあげた者は全体の10.6%で、①環境（48.1%、環境・校風、女子だけである点）、②専門教育の不備（13.0%）、③その他（38.9%）と分類できる。よかった点、よくなかった点両方について記述している者は全体の24.4%である。全体としての回答率が低く、自分の卒業した大学に対して、「よくなかった」と評価することにはためらいを感じずる者もいるであろう。そのため、上記の比率をそのまま客観的なものとみなすことはできないにしても、教育学科卒業生の日本女子大学への評価はかなり高いとみてよいのではなかろうか。以下に若干具体的な例をあげておく。

### 【よかった点】

#### ①人間関係形成の場としてのよさ

人間関係形成の場としてのよさをあげた回答の多くは、友人・先生・先輩との出会いに関して記述している。

友人・先生との出会いについては、友人との出会いに関してあげている者のほうが多いが、先生との出会いや人間関係をあげた者もいることは注目される。「女子大時代尊敬できる教授陣、また信じられる友人にめぐりあえたことが、その後の人間関係にプラスになっていると思います。」「同じような価値観をもった友人たちと出会い、いろいろな経験ができたことは良かったと思う。友人たちの考え方、生き方を見て良い意味で刺激を受けた。」など、先輩との出会いについては「女子大は歴史が長いだけあって、多くの卒業生を豊かにもっていると思う。その方々から、時に援助していただき、また同窓の者としてあたたかく配慮されてきた。」「いろいろな分野に先輩がいるので、心強く、よかったと思います。」などがあげられている。

#### ②校風のよさ

校風の面から日本女子大学を評価している記述もある。これには環境・校風、女子のみである点を含む。日本女子大学のもっている校風・雰囲気（climate）、さらには女子のみの大学であることに伴うよさを指摘するものである。環境・校風については「卒業後就職をせずに結婚し、遅くなって職業人となれたのは、女子大に「生涯教育」という考え方があり、卒業生の再教育の場があったからだとありがたく思っている。」「自由な学風だと思いますし、質素な雰囲気も好きです。」「他のマンモス大学といわれるようなところにはない触れ合いがあったため、よかったと思う。また、落ち着いた校風があり、今後も変わらずその雰囲気を保ってほしい。」「成瀬先生の教えは、今でも自分自身の生き方の根底にあり、時として思い出しては、自分自身を励ましてい

る。」など、創立者の建学の理念、三大綱領、自由、生涯学習などを評価する例が多い。

女子のみの大学であるという点については、「女性だからと卑下するわけではなく、女性でありながら、中性的な人間的な教育を受けてきた。また、お互いを尊重、認めることなど沢山のことを学んだと思う。」「生き生きとした本来の女性像を見たような気がします。学士編入でしたので、前の共学校と比べ自分のやりたいことがはっきりしている女性たちであったと思います。社会の中でこうした方々の頑張りのおかげで沢山のことが女性に開かれてきたということを実際この目で見たことが自信となっているかも知れません。」「女性としての生き方や、社会の一員としての生き方をいろいろと考えることができ、良かったと思う。共学ではこうはなかったと思う。」「女子大であるからこそ、全ての学生が同じように、男女で区別されることなく学習することができたことも良かったと思います。」など、女子大特有の環境を肯定する意見がみられる。

### ③高い社会的評価

社会からの評価に直接ふれて、日本女子大学を改めて見直す傾向もあるようである。「自分で意識していないが周囲がよく評価している。日本はまだ一個人としてより団体、現職、グループの一員などの背景の重視が強いと感じます。」「一般社会における日本女子大学の地位はかなり高いものがあり、在学中よりもむしろ卒業後にその自覚を感じる事が多くなった。卒業生としてその言動に、より注意を払うようにしている。」「歴史の古い学校に学び、社会的に信頼があり、仕事上大変プラスであった。とともにプライドを持って仕事に励んでくれた。」「伝統と歴史をもち、社会的に活躍している先輩も多いことから社会的なイメージはよく、日本女子大卒ということではいやな思いはしたことはない。」などである。

### 【よくなかった点】

次によくなかった点についてみてみよう。

#### ①環境・校風のマイナス面

学生が女子のみである点や、日本女子大学特有の環境・校風は、ある者にとってはマイナスに評価される原因ともなる。その具体的な例をあげておく。

学生が女子のみである点については「高校まで共学だったので、女子だけの生活があまり好きにはなれなかった。女子だけというのは自然ではないと思う。」「卒業生として働く仲間が少ない。共学だと男性が多分野で生涯活躍しており、情報・協力も得やすく、そんな時、女子大で失敗したと思います。」という回答例は代表的なものといえよう。

環境・校風のマイナス面を指摘している例としては、「幼少からの一貫教育にも良い点はあると思いますが、学生はなまぬるいお湯の中で甘やかされているように思います。互いに刺激し合い、励みになるような風潮ができれば、社会にもっと役に立つ人間を送り出すこともできると思います。」「もう少しいろいろな種類の人と接することができればよかったと思う。(女子大は、年齢、性別(もちろん)、家柄…などが均一すぎるのでは…)」などがある。

#### ②専門教育の不備

学習面については「ただ漠然と小学校の教員の資格を取る為に入学したので、その後の将来の目標が変わってきた時、さて、何を専門に勉強しようかと迷った。結局資格だけはとろうとあれこれ必要な単位だけは確保したが、“これを学習した”というものがまるで残っていない。」「私

が学生の頃は学習内容の間口が広く、特別何を専門に学んだか不明でした。仕事に就いてそのことがはっきりとわかり、苦勞しました。専門分野をもっと深くゼミ形式で学習できたら良いと思います。」など、専門教育やそのカリキュラムの不備に関するマイナス面を指摘する者が多い。

### 【プラス・マイナス】

次によかった点・よくなかった点の両方について記述されている例(24.4%)をあげておく。

「おおらかで優しい人達と触れ合え、生活できたことは良かった。現実を厳しく見つめ、鍛え合うムードに欠けていた。」など校風に関する意見、「今の仕事からいえば、もっと専門的な勉強ができる環境であってほしかった。もっと、卒業後のこと、とくに職業について目を向けた教育がおこなわれるべきであったと思う。」など。

以上、回答者は日本女子大学文学部教育学科という同じ環境のもとで学生生活を過ごしていたにも拘らず、個人によってとらえ方が全く異なっているという面があることがわかる。

## 6. 子どもの進学先としてみた「日本女子大学」観

日本女子大学の評価は、自分の子どもを日本女子大学へ入学させたいと考えるかどうかという点と密接に関連をもつのではなからうか。「今あなたにお子さんがいると仮定して、そのお子さんの日本女子大学入学にあなたは賛成ですか、反対ですか。またその理由はなんですか。」という質問に対する回答から、卒業生の日本女子大学観をみてみたい。

子どもの入学の賛否についての集計結果は、「賛成」40.3%、「どちらかといえば賛成」36.3%、「どちらかといえば反対」19.3%、「反対」4.1%で、8割近い者が賛成(「賛成」+「どちらかといえば賛成」)している。

では、これらの賛否の理由についてみてみよう。賛成理由の内容を分析してみると、①教育環境(43.1%、教育方針・校風、環境条件、友人関係・スタッフ、社会的評価、伝統、女子のみである点)、②母校への愛着(25.9%、母校の教育などへの満足感、附属校の教育に魅力、親子で日本女子大学への憧れ)、③子どもの意志尊重(22.5%)、④その他(8.5%)となる。一方、反対理由としては、①環境条件への批判(80.3%、共学希望、校風、専門性の不備)、②親と違う生き方を希望(6.0%、親と違う生き方、よりよい大学へ)、③子どもの意志尊重(4.3%)、④その他(9.4%)に分類できる。

### 【賛成】

#### ①教育環境を評価

とくにここでは教育方針・校風、環境条件、友人・スタッフ、女子としての教育、伝統、社会的評価について教育環境を評価し、賛成していると解釈できる。

教育方針・校風に関する記述には次のようなものがある。「おっとりとした人柄、バランス感覚、他者への関心の重さ、或いは思いやりなどが残っている。こうしたことは生きる上で大切なので。」「質実剛健な校風で、地味だが堅実な人が多く、その4年間に得ることが多い。」「歴史はあるが堅苦しくない校風、人間層の厚さ、女子大でありながら活気があるので。」「多くの価値観

を認めてくれて、自由な校風が好きである。」

環境条件では「日本女子大学の校風もさることながら卒業後生田校舎を訪れてみて自然の中の大変よい環境に感動したから。」「私が卒業したとき以上に、現在の日本女子大学はスタッフや施設が充実していると思うから。」などの回答がある。

友人・スタッフについては「明るく伸びやかで優秀な人が多い。」「学内の環境が非常に良いと思う。しっかりした家庭のしつけを受けた良識ある学友やサポートする教授など。」などの記述が多い。

女子としての教育については「男子学生に対する依存・甘えがなくてよい。」「女性として、人間としての教育にふれることができるから。」「男女共学とは異なり、女性がのびのびと自分を主張できることは大変良いことだと思いますし、一時期そういう経験をすることは貴重なことだと思います。」などの回答がある。

伝統については「伝統があり、卒業生の団体がしっかりしていること。」「伝統があるし、校風に落ち着いたよいものが感じられるから。」「創立者の考えが立派でその伝統を受け継いでいるので。」などがある。

社会的評価では「環境が素晴らしく社会的評価も高い。」などの回答が得られている。

全体的に「よかった点」として評価されていることと共通部分が多い。

## ②母校への愛着

また、卒業生として日本女子大学での生活に満足している、日本女子大学をよく知っていることによる安心感などの記述が目立つ。「私自身、日本女子大学で学べたことがとても幸せであるから。」「自分が受けてきた教育に誇りがあるし、自信があるし、幸せだと思うから、女の子が居たら絶対に入学させたい。」「私の生活経験の中でマイナス部分がないから。」「いくらかでも自分がわかっている学校であるという安心感が第一です。そして私が日本女子大学を誇りに思っていること、大好きな学校であることが理由です。」

また「自分の後輩として入学してくれればと思う。」など、親子で同じ大学への憧れ、あるいは附属校からなら賛成というケースもある。

## ③子どもの意志尊重

その他、「本人が望むなら賛成。」という意見も多い。

## 【反対】

次に、反対理由についてみてみよう。ここでも広義の環境についての記述が最も多いが、その内容については賛成の場合と異なってくる。

### ①教育環境に対する批判

反対理由としての教育環境では、共学希望、教育内容、校風があげられる。

共学希望については、「女性ばかりの環境では視野が狭くなる。特に年齢が低い時期には性別も家庭環境も様々な人と一緒に育つべきである。」「社会に出て職業に就く女性が増えている。企業では男性と共に仕事をする。その準備を学生のうちに体験させたい。」「女子大以外の世界で、男女平等意識を真からつけてほしい。もっと厳しい世界があることを人間として知ってほしいので。」「集団には男性・女性がいてこそ自然な形だと思います。女子大の存在は不自然に思いま

す。」などの記述がある。

教育内容については「もっとしっかりした資格や『職業観』を与えてくれるところに入れてほしい。」「知的好奇心が十分発揮できるとはあまり思えない。」など、教育内容の中でも特に職業意識形成に不利、カリキュラムにおける専門性の欠如などがあげられる。

校風については「自分の価値観（それに影響されるであろう子どもの価値観）が、女子大に通う方々との価値観と合わないだろうから。」「温室にいるようだから」などの意見がある。

#### ②親と違う生き方を希望

「子どもには親と違う生き方を希望する」「よりよい大学への入学を希望」などがある。

#### ③子どもの意志尊重

また「決断は本人に任せる」という意見が反対の理由としてもあげられている。

### 7. 卒業生の大学生への期待と大学生活観——後輩へのアドバイスから——

最後に、卒業生が人生の先輩として、今日の学生にどのような意見や期待をもっているのかについてみておこう。というのは、大学生に対するそうした意見や期待は、自分の大学生活および今日の大学生や大学のあり方に対する評価を暗黙のうちに示す面があると考えられるからである。「現在の日本女子大学の学生にアドバイスしておきたいことがあれば、どんなことでも結構ですからお書き下さい。」という質問に対する回答の内容は、主に次のように分類できる。全体としてアドバイスの内容は、①学習への積極的な取り組みへの期待（21.0%）、②経験・チャレンジ（20.8%）、③人格陶冶やアイデンティティの確立（20.3%）、④豊富な自由時間の有効活用（12.4%）、⑤専門性の獲得や職業意識の形成（6.9%）、⑥その他（18.6%）などにわけられる。次にそのカテゴリー別に若干内容を述べておく。

#### ①学習への積極的な取り組み

まず、学習への積極的な取り組みへの期待を表明している意見としては、次のような回答があげられる。「四年間しっかり勉強して下さい。教授陣や環境、この先の人生でやすやすとそろりものではありません。」「大学での勉強は自分でするもの、授業を受けるだけでなく、問題意識をもって勉強してほしい。」「10代から20代の4年間に学んだことは、人生の基礎になっていきます。人生80年あるようでも、現実に結婚し、子どもを育てていくと、自分の仕事、勉強したいことを実らせる時期と子育ては重なってしまいます（25～35歳ぐらい）。脳細胞が活発に動く今、食欲なくらい勉強して下さい。」など。

#### ②豊かな経験の場としての活用

次に、さまざまな経験を積むことを奨励する声も多い。「一番無鉄砲ができる時代ですから、学びたいことを貪欲に追求して行って下さい。それがたとえ社会に出て直接つながらなくても、きっと豊かな栄養源となっているはずですよ。」「貴重な4年間を、勉強でも何でもいいから一生懸命やって、いろいろなことに積極的に挑戦してほしいと思います。そんな中でも自分の人生について、真の自分について、真の生き方について等々沢山考えてほしいと思います。」「学生生活4年間はその後生き方のほんの出発点です。その出発点が大きい方がいろいろな人生を送ることができます。何でもチャレンジして下さい。」など。

### ③人格陶冶やアイデンティティの確立

人格陶冶やアイデンティティの確立の場として大学生生活を生かすことをすすめる意見としては、次のようなものがあげられる。人間形成の場としては「生涯の糧となる、考え方や自分の生きていく姿勢を確かなものにしてほしい。」「大学もブランド化している昨今ですが、大学名におごることなく、自分自身をみがいて下さい。社会へ出れば生身の人間としての勝負です。」「流行、トレンドに流されず、しっかりした自分の考えをもってほしい。人と同じであることに安堵感をもつよりも、自分の個性を大切にしてほしい。」「女性が一生仕事を続けることは予想以上に難しい。自分が子育て時代をどう生きるのか早めに考え、ライフサイクルという視点から、大学時代を有意義に過ごして下さい。」「今の私でいいのか問いかけながら生きて下さい。」など。

### ④豊富な自由時間の有効活用

自由な時間がたっぷりある学生時代を有意義に過ごしてほしいという意見も多い。「時間を自分の思い通りに、自分のために使えるのは、この時期だけなので、できるだけ自分らしい自分しかできないことを一生懸命にやってほしいと思います。」「社会に出ると自由な時間が激減するので、無駄や後悔のない生活を送ってほしいと思う。」「限られた時間を大切に使う、前向きに努力してください。」

### ⑤専門性の獲得や職業意識の形成

専門性の獲得や職業意識の形成を重視する意見としては、次のようなものがあげられる。「自分のテーマを絞って、それに向かって徹底的に学んでほしいと思います。社会にその能力を発揮して行ってほしいと念じております。」「専門の学問を少しでも深く掘り下げて、大学らしい知識と専門性を身につけて社会で活躍してほしい。」「何事も“継続は力なり”ですから、大学卒業後も、学んだことが少しでも生かせる職場について、今度は実践しながら学んで行ってほしいと思います。」「卒業後、どんな形であれ職業に就いて社会に貢献し、一女性として大いに活躍してほしいです。」など。

## 8. まとめと今後の課題

以上、卒業生の大学に対する意識や評価の実態を、日本女子大学教育学科卒業生の自由回答結果の内容分析に基づき、明らかにした。それらはおおよそ次のようにまとめることができよう。

①卒業生は、大学を教育・学習の場、自己開発の場、出会いと人間関係発展の場としてとらえている。そして大学生生活あるいは大学教育によって、内面的な価値を獲得したと認識している者が多い。その意味では本調査の卒業生の大学評価は高く、大学生生活は人生における貴重な生活場面として認識されているといえよう。

②そうした高い大学評価の背景になっているのは、友人、教師、先輩との人間的な交流、校風や大学の環境条件、さらには大学の社会的な評価などである。特に友人については、大学時代に得た人間関係がその後の生活にも大きな意味をもつと考えている場合が多いようである。また、日本女子大学の社会的な評価を背景に、日本女子大学を卒業したことを精神的な支えとしている者や、社会に出てから日本女子大学の価値を再認識するケースも少なからず存在している。

③教育環境条件や校風については、卒業生によって評価が分かれている。同じ日本女子大学で学

んだ経験をもつ者同士でも、社会的経験の違いや価値志向の違いによって、日本女子大学の教育環境条件や校風を、メリットあるいはデメリットとみるという違いが生じているように思われる。

特に日本女子大学の環境条件にデメリットを感じている者は、キャリア指向が強い傾向があるように思われる。このような卒業生からは、教育内容について、専門性の欠如、職業観の形成のための環境（友人の職業意識のあり方等）条件の悪さ、ネットワークの不備、競争意識の低さなどが女子大学のデメリットとしてあげられている。一方、日本女子大学の教育内容や環境条件をプラスとみる者は、校風、幅の広い学習、自由なカリキュラムに加えて、友人関係、卒業生とのつながりなど人格陶冶や人間関係面で大きなメリットを感じている傾向がうかがえる。

新堀通也は教育効果を考える際の主要な分類として、①プラス（正）の効果とマイナス（負）の効果、②短期的効果と長期的効果、③実質的效果と象徴的效果、④顕在的效果と潜在的效果をあげ、教育効果は長期的効果、象徴的效果、潜在的效果の評価がより困難であると述べている<sup>3)</sup>。大学の教育効果も同様の観点から捉えられる必要があるであろう。本研究においても「卒業してからやっと女子大の良さを気付いたように思う。」など記述の中にもみられるように、年を重ね、さまざまな経験を積むにつれ、大学評価が変化していく面もあるようである。特に女性の場合、ライフコースとの関連によって価値観が変化したり、求めるものが異なることもあり、何をもって効果とするかを判断することが困難な面もある。

本研究は、大学評価について卒業生の視点から実証的に検討したという点において、またある意味では大学教育の長期的潜在的効果を考える上でも、有益なデータを提供することができたのではないかと考えている。しかし、本研究は日本女子大学文学部教育学科の卒業生というきわめて限られた卒業生を対象にしたものであり、今後さらに多くの事例研究や統計的な研究が必要であることはいうまでもない。また内容的には本研究もさらにライフコースとの関連などについて、より詳細な検討も必要でないかと考えている。

#### 注

- 1) 喜多村和之「大学評価の可能性」, p.4, 『大学評価の理論的検討』広島大学大学教育研究センター, 1991年
- 2) 金子元久・山内乾史・小方直幸「卒業生からみた広島大学の教育 中間報告書」広島大学大学教育研究センター, 1993年9月
- 3) 新堀通也「教育効果のとらえ方」『教育の効果』東信堂, 1987年, pp.31-38

この研究は日本女子大学の平成5年度大橋廣記念奨学金の交付を受けて行われたものである。

日本女子大学 紀 要 人間社会学部 第4号

---

平成6年(1994)3月23日 発行

紀要委員 金子マーティン・斎藤広信

発行所 日 本 女 子 大 学

〒112 東京都文京区目白台2-8-1

電話 03(3943)3131 (代表)

人 間 社 会 学 部

〒214 神奈川県川崎市多摩区西生田1-1-1

電話 044(966)2121 (代表)

制 作 開 成 出 版 株 式 会 社

東京都文京区関口1-27-10 電話 03(3232)7281

---